

祖堂集卷第十三

石頭下卷第十曹溪第八代法孫

招慶和尚、長慶に嗣ぐ、泉州に在り、師、諱は道匡、漢國朝州の人なり、姓は李。閩に入つて怡山に参見し、密に心源に契つ。後ち泉州王太尉轉法輪を請つを以て、閩王は紫を賜い、法因大師と號せしむ。

師、上堂良久して云く、大衆諦聽せよ。汝が与めに真正に挙揚せん。還た落處を委するや。若し落處を委すれば出で来たれ。大家證明せん。若し無くんば一時に謾糊し去るなり。時に人有つて問う。大衆雲集せり。請う、師、真正に挙揚せよ。師良久して云く、未だ誰か是れ聞者なるかを委せず。云く、聞者聞く、如何なるか是れ聞者。師云く、雀、鳳を逐つて飛ぶ。

師が上堂してややあつて云う、大衆諦聽せよ。諸君のために真正に挙揚しよう。それで落ちつきどころが解るか。もし落ちつきどころが解るならば出で来たれ。みんなが證明するだろう。もしないならば一時にくらましたことになる。その時ある僧が問う、大衆集まつております。師よどうか真正に挙揚して下さい。師はややあつて云う、誰が聞者なのかはまだ解らない。僧が云う、聞者が聞きます。聞者はどのようなものでしょうか。師が云う、大鵬のあとを追つて飛ぶ雀だ。

・聞者聞云 現にこのわたしが聞いております。ではこのわたしは何でしょう。

問う、靈山の一會は迦葉親しく聞く。未審いぶかし、招慶の筵中は誰當か視聽する。師云く、汝還た聞かや。僧云く、与摩ならば則ち迦葉耳を側つるは虚しく其の名を得るのみ。師云く、更に一著子有らば作摩生。学人進んで問わんと擬す。師、便ち出でよと喝す。

問う、靈山会上では迦葉が親しく釈迦の説法を聞きました。ところで招慶和尚の法筵では一体誰が視聽するのですか。師が云う、お前さん聞こえるか。僧が云う、そんな風では耳をそばだてる迦葉というのが虚名になりました。師が云う、もう一手かけるとしたらどうやるか。僧は進んで問おうとする。すると師は出て行けと怒鳴った。

・ 与摩則迦葉側耳虛得其名　　そういう説法ではこの私という立派な迦葉の名が泣きます。

・ 更有一著子作摩生　　なかなかよろしいがもう一手かけるとしたらどうするか。儀礼的な問答である。

又の時に上堂して云く、古人道う、門を開きて知識を待つも、知識は相過ぎず、と。招慶今日身命を惜みまずして門を出でて相訪わん。知音の者有りや。

・ 古人は龐居士、卷十五（一〇五頁）を見よ。

問う、如何なるか是れ招慶提宗の句。云く、招慶を昧著するを得ざれ。学人礼拝して起つ。師又た云く、招慶を昧著するを得ざること、是れ汝に囑す。什摩の處か是れ招慶が提宗の處。

問う、凡そ言句有らば盡く不了義に属す。如何なるか是れ了義。師云く、若し闇梨に向つて道わば、還た是れ不了義。進んで曰く、什摩と為てか此くの如き。師云く、闇梨適来什摩と問いしぞ。

問う、およそ言句にわたる時は不了義であると云われます。了義とは何でしょうか。師が云う、もしお前さんに向かって云ったらやはり不了義になる。進んで云う、どうしてそうなるのですか。師が云う、お前さんいま何と云ったのだ。

問う、師子未だ吼せざる已前は、什摩と為てか衆類同居する。師曰く、驚かざればなり。進んで曰く、只だ吼せし後の如きは什摩と為てか毛羽脱落する。師云く、是れ闇梨が分上の事なり。進んで曰く、師子を除非して、請う、和尚一句を道え。師云く、与摩の時に向かつて一問を致し来れ。

問う、師子がまだ吼えない前は、どうして色々な動物と一緒に居るのですか。師が云う、おどろかないからだ。進んで云う、では

吼えた後はどうして毛や羽が抜けおちるのですか。師が云つ、お前さんのことだ。進んで云つ。まさにその師子として、どうか一句おっしゃってください。師が云つ、その時になって一問をもつて来い。

・ 除非 まさに、ただの意。

・ 向与摩時致一問来 わしが師子吼するとき、毛羽脱落しないで質問できるならやつて見る。致は原文では置。

問つ、諸佛は出世して普く含生を潤す。未審いざかし、招慶は出世して如何ん。師云く、我れ敢えて汝が底を瞎却せじ。

問つ、諸佛は出世してあまなく生きとして生けるものをいつくしみます。ところで招慶和尚は出世してどうするのですか。師が云つ、わしは、せつかくお前のもっているものをめぐらしたりはできません。

問つ、居止する處無し、還はた学人の立身するを許すや。師云く、上に於いては足らず、下に足ぶれば餘り有り。学云く、与摩ならば則ち学人一步を進めん。師云く、汝も也た莫口解脱なり。

問つ、居り場所がないのですが、それでもわたくしが生い立つことが許されるでしょうか。師が云つ、おびに短したすきに長し。学人が云つ、ではわたしは一步進みましょう。師が云つ、お前も莫口解脱だ。

・ 莫口解脱というのは五十六九頁にも用例が見えるが、意味がとりがたい。口解脱が一語か。

問つ、如何なるか是れ問。師云く、与摩に来たりて問わず。如何なるか是れ答。師云く、你に向かつて什摩をか道わん。進んで曰く、不問不答の時如何ん。師云く、你も亦た須らく別頭なるべくんば好し。

・ 別頭 意味不明。

問う、古佛の道場、如何にしてか到るを得ん。師云く、更に什摩の處に去かんと擬するや。学云く、与摩ならば則ち学人退一步せん。師云く、又はれ乱走して作摩。

問う、古佛の道場にはどうやったら到り得ましようか。師が云う、あらためてどこに行こうというのだ。学人が云う、それならばわたくしは一歩さがりましよう。師が云う、こんどは又たやたら走りまわってなんだ。

問う、如何なるか是れ学人が本来の心。師云く、即今是れ什摩の心ぞ。学云く、学人識らざるを争奈何んせん。師云く、識らざれば識取せば好し。

問う、何がこのわたくしの本来心でしょうか。師が云う、今のは一体何心なのだ。学人が云う、いかせんわたくしには見てとれないのです。師が云う、見てとれないのならちゃんと見てとってほしいものだ。

問う、此は是れ和尚が肉身、如何なるか是れ和尚が法身。師、手を以て胸に搭す。進んで曰く、与摩ならば則ち分付し去れり。師云く、是れ法身か、是れ肉身か。

問う、これは和尚さんの肉身です。なにが和尚さんの法身ですか。師は手を胸におく。進んで云う、では頂戴いたしました。師が云う、法身をか、肉身をか。

問う、環丹の一顆、鐵を點せば金と成し、妙理の一言、凡に點せば聖と成す。請う師點せよ。師云く、點せず。学云く、什摩と為てか點せざる。師云く、良を抑えて賤と為すを欲得せず。進んで曰く、与摩ならば則ち学人を欺らざり去るなり。師云く、閑言語すること莫れ。

問う、環丹は一粒で鉄に号令かければ金に変え、妙理の一言は凡夫を聖者に変えると云われます、どうかわたしに点じて下さい。

師が云つ、いやだ。学人が云つ、どうしていやなのですか。師が云つ、良民をおとしめて、賤民にするようなことはしたくない。進んで云つ、それでこそわたくしをみくびらなかつたというものです。師が云つ、よけいなことを云うな。

・環丹 円覚経略疏には「還丹一粒點鐵成金 眞理一言點凡成聖」として出ている。還丹に改めた方がよいであろう。

問う、四方帰崇す、何の道理に憑りてか人天の應供を消得せん。師云く、若し一物の憑る所有らば一滴水も也た消すること難し。進んで曰く、直に一物も留めざるを得れば還た消得するや。師云く、上に於いては足らず、下に足ぶれば餘り有り。進んで曰く、此の如しと雖然いえども賞有り罰有り。師云く、亦た汝の委せんことを要す。

問う、万人が帰崇します。どういふ道理によつて人天の供養を受け得るのですか。師が云つ、もし何か一つでも道理によつていたら、一滴の水でも使う資格はない。進んで云つ、とことん一の道理もとどめなければ受けることができるのですか。師が云つ、帯に短したすきに長し。進んで云つ、それはそうです。賞罰があります。師が云つ、そのこともお前さんがつまびらかにする必要がある。

・人天應供 人天供養の誤りか。

・有賞有罰 中途半端だといわれたことに対し、どう呼応するのかよくわからない。

問う、三界忙忙たり、如何にしてか出するを得ん。師云く、一法も捨てず。学云く、忙忙たるを争奈何せん。師云く、當に直に除断して肯わざるべし。

問う、三界はとりとめがありません。どのようにして出離することができましようか。師が云つ、一法も捨てない。学人が云つ、とりとめないのをどうしてくれますか。師が云つ、とことん排除してうへなわなないようにしなければならぬ。

・忙忙 茫茫と同じ。とらえどころのない量感。南陽慧忠國師の伝に「肅宗皇帝問、一切衆生忙忙業性無本可據、日用而知、

無由得出離於三界、乞師方便弟子与衆生離於生死云々」という問答が見える（一―二二八頁）。

・不捨一法 滄山靈祐の語に「万行門中不捨一法」というのがある。

問う、如何なるか是れ与摩に去る底の人。師云く、還た与摩に人に問うや。又云く、頭を廻らさず。問う、如何なるか是れ与摩に來たる底の人。師云く、還た會するや。又云く、滿面忻歡す。問う、如何なるか是れ不來不去底の人。師云く、与摩の時に向かつて問い將ち來たれ。又云く、還た与摩に人に問うや。

・全体に如来、如去というものが前提されている。

・還与摩問人摩 与摩去底人でもそんな風に質問するだろうか。

・還會摩 目の前に居るんだが分かるか。

・滿面忻歡 如来の相好。

・向与摩時間將來 お前さんが不來不去底人になつたとき質問をもつて來い。

問う、菩薩は恒沙の如きも、什摩と為てか佛智を知る能わざるや。師云く、道うを見ずや、唯だ佛と佛とのみ乃ち能く之を知る、と。又云く、汝還た當り得るや。学云く、惻得し能わざるを争奈何せん。師云く、如許多の時、そこはく什摩の處にか去き來たれる。

問う、菩薩は恒河の砂ほども居るのに、どうして佛智を得ることはできないのですか。師が云う、唯だ佛と佛とのみ乃ち能く之を知るというではないか。又た云う、それでもお前さん当たりうるか。学人が云う、おしはかることのできないのをどうしてくれます。師が云う、あれほどの間、どこをうろつろつしていたのか。

問う、如何なるか是れ沙門行李の處。師云く、自ら委せしむること莫れ。進んで曰く、還た行李するや。師云く、略虚なること莫

れ。

・自委 人の云いなりになる。主体性のないこと。

・略虚 うわつつらをかいなでする。

問う、如何なるか是れ沙門行。師云く、非行行ぜず。学云く、如何にしてか保任せん。師云く、汝適来<sup>せきらい</sup>什摩と問いしぞ。

・保任 非行不行ということとびたり相即してそれに堪える。

・汝適来問什摩 保任するには沙門として以外に道はない。

問う、請う師。来情を却けざれ。師云く、此くの如しと雖然<sup>いえど</sup>も、更に什摩の時を待たん。進んで曰く、撃電の機は意を措くことを為すこと難し。師云く、何ぞ煩詞を假らん。

問う、どうか師よ、わたくしのまことをしりぞけないで下さい。師が云う、そうしようと思うが、あらためていつを待とうというのだ。進んで云う、いなすまの機は心を向けるひまがありません。師が云う、多くを云う必要はなからう。

問う、目瞪し口呿する底の人来たならば、師、如何にしてか撃發せん。師云く、何處に与摩の人有りや。学人云く、如今は則ち無きも、忽ち有らば如何ん。師云く、有るを待つは則ち得たり。進んで曰く、終に道わじ、和尚人の為にせずとは。師云く、垵鳴聲すること莫れ。

・撃發 卷九、九峯和尚の伝に、「僧曰、古人為什摩道、直得上上者、亦須撃發」(三一二六頁)と見える。こここの目瞪口呿底人も上上者のことであらう。

・待有則得 有るのを待つのは結構だ。待つということについてはわしは何とも思わない。

・終不道和尚不為人　それが和尚さんの為人のところですね。

・院鳴聲　湯を注いだ時に碗が立てる無機的な音。無意味な発言に喩える。

問う、如何なるか是れ無句中の有句。師云く、道わず亦た道わず。学人云く、請う師、挙揚せよ。師云く、什摩の處にか去き来たりし。

・什摩處去来　どこに行っていたのか。不道亦不道が師の挙揚なわけである。

問う、古佛の機、已に人有つて致し了れり。未審し、師意如何ん。師云く、古佛の機、已に人有つて致し了れり。進んで曰く、与摩ならば則ち造次にするは宜に非ず。師乃ち休し去る。

問う、古仏の機はすでに出して見せたものがあります。そのところを師はどう思われますか。師が云う、古仏の機はすでに出して見せたものがある。進んで云う、それならばつかつなことはすべきではありません。そこで師は問答をうち切った。

・与摩則造次非宜　それなら古仏の機のことをおいそれとどのこつのは控えた方がよろしいようですね。

・致　原文は置。

・師乃休去　乃というのは、師もまた造次非宜と感じたからであろう。

問う、渾庵の提唱は学人根思遅廻なり。曲げて慈悲を運らせて、一線道を開け。云く、這個は是れ老婆心。(云く)与摩ならば則ち悲花剖析し、已に尊慈を領せり。未審し、従上の宗乘如何にしてか挙唱せん。(云く)与摩ならば須索く你親しく問うて始めて得べし。

問う、まる出しの提唱は、わたくし頭がにぶくてわかりません。どうかつぶさに教えをたれて、いとぐちをつかませて下さい。師が云う、それが老婆親切なのだ。僧が云う、そういうことならば、慈悲の花がひらき、はやくもおっしゃることがわかりました。



では従上の宗乗はどのように挙唱したものでしょう。師が云う、そういう問いならば、お前さんが自分の肉声で問いを発してはじめてその資格があるのだ。

・未審云 少しも尊慈を領していないことを露呈。

問う、疑えば則ち途中の作、疑わざれば則ち坐家の兒。此の二途を離れて、乞う師、方便せよ。師云く、未曾將曲与汝離什摩。進んで曰く、与摩ならば則ち氷消瓦解す。師云く、動も亦た你致し、静も亦你致す。

・未曾將曲与汝離什摩 未だ曾つて曲を將つて汝に与えず、什摩をか離れん。と読むのであろうが、曲の字が可怪しい。師の云わんとする方向としては、わしは二途なぞお前さんに与えたことはない、どこを離れようというのだ、というのである。

・動静は途中と坐家に対応する。致は原文置。

問う、如何なるか是れ眼處に聲を聞く。師禅指す。云く、若し答話を待たば耳根に落し去るなり。云く、我道う、汝が領處錯れり、と。

問う、眼處で音を聞くとはどういふことですか。師は指を鳴らす。云う、もし師の答えを期待するならば耳處で聞くことになつてしまいます。師が云う、云つておくが、お前さんの領納の處はずれてゐるぞ。

・若待答話落耳根去也 師の禅指の説明に依じて、確かに眼處で聞きとりました、と云いながら聞いていない。

問う、佛魔不到の處未だ是れ学人の自己ならず。如何なるか是れ学人の自己。師云く、我道わば、你還た信ずるや。学人云く、便ち請う、師道え。師云く、你は話墮せり。

問う、佛も魔も到らない處、それは未だわたくしの自己ではありません。何がわたくしの自己でしょうか。師が云う、わしが云うたらお前さん信じるか。僧が云う、おっしゃって下さい。師が云う、お前さんほろが出た。

・話随 論者が破綻を来すこと。

・便請師道と師という佛魔の到ることを許した僧には、佛魔不到處未是学人自己などという資格はないであろう。

問う、警起すれば便ち息む。此の人宗乗中に於いて如何ん。師云く、困魚止泊し、病鳥蘆に棲む。宗乗中与摩に語話することを作す可からず。学云く、如何なるか是れ宗乗中の事。師云く、招慶什摩と道いしぞ。

・警起 一念の動くこと。

・困魚云 宝蔵論第一に困魚止瀝、病鳥棲蘆、其二者不識於大海、不識於叢林。人趨乎小道、其義亦然云とあるによる。

問う、如何に履踐せば則ち當人に負かざることを得るや。師云く、若し履踐することを求むれば則ち當人に負かん。進んで曰う、与摩ならば則ち性に任せて流に随い去らん。師云く、還た你に向かつて与摩に道いしや。

・任性随流 第二十二祖摩拏羅尊者の偈に「随流認得性、無喜復無憂」とあるのを参照。

問う、文殊の剣下に承當せざる時如何ん。師云く、未だ是れ好人ならず。学人云く、如何なるか是れ好人。師云く、是れ汝話墮せり。

問う、文殊の剣すら受けつけないのはどうですか。師が云う、未だ立派な人ではない。僧が云う、どんなのが立派な人ですか。師が云う、それボロが出た。

・話墮 前出参照。

問う、諸縁は則ち問わず。如何なるか是れ和尚が家風。師云く、寧ろ清貧にして長く楽しむ可きも、濁富にして多憂なることを作  
やう。

・諸縁 誰れの法を嗣いだとかいふ種々の閱歴。

問う、如何なるか是れ南泉一線道。師云く、汝に向かつて道うことを辞せざるも、較中又た較有らんことを恐る。

問う、南泉の一線道とはどういふことですか。師が云う、お前さんに云つてやることはよいが、そうしたらへだたりの中にまた  
へだたりが出来ることになるのではないか。

・南泉一線道 南泉の伝に「師在方丈、與杉山向火次、師云、不要指東指西、直下本分事道来。杉山插火箸、叉手立。師云、  
雖然如是、猶較王老師一線道」とある故事にもとづく。

問う、如何なるか是れ佛法の大意。師云く、七顛八倒。

・七顛八倒 筋道が通らず乱れている。めっちゃめっちゃ。

師、時有つて云く、言前に薦得すれば平生に辜負す。句後に機に投ずれば殊に道躰に乗く。僧便ち問う、什摩と為てか此くの如き。  
師云く、汝且く道え、從來の事合はた作摩生。

師はあるとき云われた。言葉以前のところで表出すれば平常底にそむくし、言葉の世界で表現しようとするればとりわけ道体から  
それることになる。そこで僧が問う、どうしてそうなるのですか。師が云う、お前さん云つてごらん、お前さんの平生は從來どつ  
であつたかを。

問う、古人言える有り、般若は無知にして縁に遇つて照らす、と。如何なるか是れ縁に遇つて照らす。師乃ち手を提起す。

・般若無知云 涅槃無名論に云う、「経曰、法身無象、應物而形、般若無知、对縁而照」。

問う、古人相見し、目撃道存す。今時は如何にしてか相見する。師云く、如今更に目撃道存と道つ可からず。学云く、与摩ならば則ち適来已に是れ非次にし去れり。師云く、過を知れば必ず改む。

・目撃道存 莊子田子方篇、孔子が温伯雪子に面会した時の話として、「仲尼見之而不言。子路曰、吾子欲見温伯雪子久矣、見之而不言何邪。仲尼曰、若夫人者目撃而道存矣、亦不可以容聲矣」とあるによる。一日見ただけで、道をそなえていることがすぐわかる。

・如今不可更道目撃道存 今の相見はあらためて目撃道存をさえも云う必要はない。

・与摩云 そついうことならさっきの私の質問は非次だったわけですね。

・知過必改 千字文の語。

問う、古人言える有り、皮膚脱落し盡くして、唯だ眞實在る有るのみと。皮膚は則ち問わず。如何なるか是れ眞實。師云く、是れ皮膚を將つて汝に過与せしこと莫きや。

・皮膚脱落云 馬祖語録薬山との問答の條に、「一日祖問之曰、子近日見處作麼生。山曰、皮膚脱落盡、唯一眞實云」とある。元来は涅槃經三十五に出る語。

・師の答えは皮は問わないと氣負っている僧を、その皮をわしはお前さんに手渡したのではないかな、といなしている。

問う、承らく、教中に言える有り。正直にして方便を捨つ、と。方便は則ち問わず。如何なるか是れ正直。師云く、方便裏に収め得るや。

・ 正直捨方便 法華經方便品に「今我喜無畏、於諸菩薩中、正直捨方便、但説無上道」とある。

・ 方便裏収得摩 お前は正直を方便の中に収斂し得るか。

問う、常に大海に居り、什摩と為てか口裏に煙生するや。師云く、但だ大海のみに非ず、醍醐も亦た須らく吐却すべし。僧云く、与摩ならば則ち学人与摩にし去らず。師云く、若し与摩にし去らざれば、阿誰れの罪過ならん。僧、師の答話に謝す。師云く、更に你に嘖状を与えし。

・ 常居大海、為什摩口裏煙生の句の出處不明のため、全体の意味がとらえ難い。

・ 嘖状は判決文。

問う、提綱を假らずして還た提處有りや。師云く、試みに与摩にする時を挙し看よ。僧進んで曰く、提處無しと道う可からず。師云く、你作摩生かせん。学人礼拝す。師云く、蝦跳んで蚪を出でず。

問う、大綱をとらないでとり上げようがありますか。師が云う、ひとつそいつ風にする時を云ってみよ。僧が進んで云う、とり上げようがないとは云わせませんぞ。師が云う、お前さんならどうする。学人礼拝する。師が云う、海老はとんでも升の中だ。

・ 試拳与摩時看 ちよっとしっくり来ない語である。テキストに問題がありそうである。

・ 你作摩生 不可道無提處なら不假綱にして提處あらしめてみよ。

問う、教中に言有り、大道を行かんと欲せば小径を視ること莫れと。未だ委せず、如何なるか是れ大道。師云く、行き得るや。僧

云く、学人未だ會せず。乞つ、師進向せよ、師云く、我若し汝が与めに進向せば、汝が大道を蹉却せん。

・教中有言云 維摩經弟子品。

・不會 わかりません、とできませんとの両様に解される。

・蹉却汝大道 せっかくのお前さんの大道を、お前さんが歩けないようにしてしまふぞ。

問う、古人言う有り、閻浮に大寶有り、少見にして得る人希なり、と。如何なるか是れ大寶。師云く、見るや。僧、師の垂慈を謝す。師云く、大か小か。

・古人有言云 出典不明。

・大小 疑問の言葉、どれ位の大きさか。

問う、古人言う有り、未だ絶塵の行有らずして徒らに男子の身となる、と。如何なるか是れ絶塵の行。師云く、我若し一法の微塵ばかりを將つて、汝に与えて受持せしむれば則ち絶つを得ず。僧云く、便ち与摩にし去らん。還た得たるや。師云く、汝也た貪頭なること莫れ。

・古人有言 出典不明。

・絶塵の語は莊子田子方編にもとづく、「夫子歩亦歩、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳、夫子奔逸絶塵、而回瞠若乎後矣」、塵さえたてないほど迅速なこと。

・貪頭 不詳。よくばること、あるいはよくばりの意か。

問う、古人言う有り、一句了然として百億を超ゆ、と。如何なるか是れ百億を超ゆる底の句。師云く、汝が這个の話に答えず。僧

云く、什摩と為てか答えざる。師云く、適来什摩と問いしぞ。

・古人有言<sup>云</sup> 證道歌に「粉骨碎身未足酬、一句了然超百億」とある。

・適来問什摩 百億の句を超える底の句をお前さん問うたのではなかったか。

問う、古人言う有り、智を以て知る可からず、識を以て識る可からず、と。此は是れ今時の昇降する處、未審<sup>いぶか</sup>し向上の一路 和尚如何にして学人に示及するや。師云く、智知識識と道う可からず。僧云く、与摩ならば則ち終に錯つて人に拳似せず。師云く、你作摩生か拳する。学人云く、當不當。師云く、此は是れ答話、你作摩生か拳する。僧云く、和尚与摩に道うは則ち得たり。師云く、你作摩生か合殺する。

問う、古人が言っております、智をもっても知り得ないし、識をもっても識し得ない、と。これは世間の人があだこうだと言いつ合っているところですか。と。そこでその上のところを和尚さんどのように私に示してくださいませか。師が云う、「智知識識」と道うことはできない。僧が云う、そうすると決してつかつなことを人に云わないのですね。師が云う、お前さんならどう示すか。学人が云う、當不當。師が云う、それは答話だ、お前さんはどう示すか。僧が云う、和尚さんだからそんなことを云うていて済むのですよ。師が云う、つきつめたところお前さんどうしようと言つのだ。

・古人有言<sup>云</sup> 維摩經見阿閼佛品。

・今時 向上に対する。

・智知識識 不可以智知、不可以知識をばしよって云つたもの。識の字の下に得の字があるが、省いて読む。

・拳似於というのは珍しい例、似の字が元來於の意味を有する。

・當不當 招慶和尚の師、長慶の伝に多出する語。元來長慶和尚の語のようである。道得道不得と似た意味をもつようである。

師、僧に問う、你的名は何摩ぞ、對えて云く、慧炬。師便ち杖を提起して云く、還た這个を見るや。對えて云く、物有らば則ち照らす。師云く、還た這个を見るや。對えて云く、適來和尚に向かつて何摩と道いしぞ。師云く、這个を争奈何せん。對えて云く、和尚是れ何摩の心行ぞ。

・有物則照 和尚の提起した這个を完全に無視し去っている。和尚の敗けである。

因みに古時一尊者有り、山中に在りて住す。自ら牛を見る次で、忽ち賊の頭を斫るに遇う。其の尊者頭を把りて牛を覓むる次いで人を見て問う、只だ無頭の人のかきんば、還た活くるを得るや。對えて云く、無頭の人争でか活くるを得ん。其の尊者當時に頭を抛ちて便ち死せり。師遂に拈じて僧に問う、尊者無頭。何摩人か牛を覓むる。對えて云く、那个の人。師云く、只だ那个の人の如きんば還た牛を覓むるや。僧無對。師代わつて云く、死人に同ず可からず。

報慈和尚、長慶に嗣ぎ、福州に住す。師諱は光雲、泉州莆田縣の人なり。玄沙に於いて出家し、纔かに尸羅を具するや、便ち祖道に參ず。而して怡山に遊び、頓に真心を暁る。後ち閩主請つて報慈に住せしむ。紫を賜い、慧覺大師と號せしむ。

師、昇座して衆に謂いて云く、其甲道薄く人微なり。皇恩を叨奉し、請命せらて從上の祖宗を傳持し、貴ひがに相承して断絶せしめざることを得たり。今日の衆中、還た繼踵するに堪任する底の人有りや。若し是れ利根底にして相投すれば瞬視するを煩わさず。何に況や更に脣鋒しんぽうに涉りて方て有るを知ると為さんや。与摩に道うも也た未だ他の諸方の明眼人の肯わざるを招くを免れざらん。

問う、師は超覺鎌口の訣を承く、如何にしてか人に示さん。師云く、頼に我が柱杖在らず。学云く、与摩ならば則ち深く尊慈を領



せり。師云く、我れ汝を肯つを待たば則ち得ん。

問う、和尚さんは超覺鑱口の教えを伝えておられます。それをどのように私にお示し下さいますか。師が云う、わしの手許に杖がなかったのを幸いと思え。学人が云う、そういうことなら和尚さんのおっしゃることがよく解りました。師が云う、わしがお前を認めたらばそういうことを云うのもよからう。

問う、玄沙の寶印、和尚親しく傳う、未審し今日の一會、何人に付囑するや、師云く、且く是れ你に就かば、解く承けて置き得るや。

・且就是你還解承置得摩 意味がよく解らない。

問う、諸位を歴せずして如何にしてか道と相應せん。師良久す。学人措く罔し、師云く、此の問有りとは雖も何ぞ問無きに異らんや。

問う、五十二位とかを経ずにどのように道と相應するのでしょうか。師はやや黙つておられる。学人はどうしていいか解らないでいる。師が云う、せつかく問うたのに問わなかったのと同じではないか。

僧問う、和尚が適來の拈掇は猶お是れ第二機。師良久す。学人措く罔し。師遂に云く、合に汝が三拜を消得すべし。学云く、与摩ならば則ち但だ学人のみに非ず、大衆も頼有らん。師云く、亦た須らく諱却すべし。

師入朝す。皇帝問う、報慈は聖泉と相去ること近きや遠きや。対えて云く、若し近遠を説かば親しく到るに如かず。師却つて問う、皇帝陛下は曰び万機に應ず、是れ什摩の心ぞ。皇帝云く、什摩れの處より心を得來たるや。師云く、豈に無心の者有らんや。帝云く、那邊の事作摩生。師云く、請う、那邊に向かつて問え。帝云く、道えり。師云く、皇帝衆人を讓せんと要するは則ち不可。

問う、大衆臻湊す、請う師挙揚せよ。師云く、更に幾人の未だ聞かざる有りや。学云く、与摩ならば則ち上来するを假らず。師云く、上来するを假らざることは也た且くまか従す。汝は什摩の處に向かつて會するや。僧云く、若し所在有らば則ち和尚に辜負せん。師云く、只だ精庵を弁せざるを恐る。

問う、大衆が集まっております。どうか法を説いて下さい。師が云う、いまさら何人わしの法を聞いたことがないものがあるのだ。学人が云う、聞いていないのならやって来ることは必要ないでしょう。師が云う、やって来ることは必要ないということとはまあおいとして、お前さんどこらへんで解っているのだ。僧が云う、若し在り所があるのなら和尚さんにそむくことになるでしょう。師が云う、お前はごつもものけじめがついとらんよつだな。

師、僧に問う、纔かに是非有らば粉然として心を失す。祖師与摩に道う、還た過有りや。对えて云く、無しと道う可からず。師云く、過何に在りや。对えて云く、合に与摩に道うべきや。師云く、汝は只だ是れ擔枷の判事なり。師代わつて云く、只だ自ら嚴條を犯すが為めなり。僧進んで云く、如何に道得せば、此の過を免れ得ん、師云く、雨順にして風調い、極めて済す所有り。

師が僧に問う、是非にわたつたとたん粉然として心を見失つ、と祖師がそう云っているが、一体とががあるだろうか。答えて云う、ないとは云えませんが。師が云う、とがはどこにあるか。答えて云う、そう言うてよろしいんでしょうか。師が云う、お前さんは正しくくびかせつけた裁判官だ。師が代わつていう、ただわれから嚴條を犯しているからだ。僧が進んで云う、どのように道得すればこのとがを免れ得ましようか。師が云う、雨風が順調でみのりが多い。

師、僧に問う、靈利の参学は道伴と肩を交えて過こすも便ち一生見るを喜ばざることを得。為復はた實、主を見るを喜ばざるか、為復た主、實を見るを喜ばざるか。对えて云く、主、實を見るを喜ばず、師、之を喝す。明朝却来して云く、實、主を見るを喜ばず。師

又た喝す。師代わつて云く、投機することを弁ぜざれば則ち實主分上に向かつて行ぜん。僧進んで云く、只だ見るを喜ばざる底の人の如きんば、合<sup>は</sup>た什摩れの田地に到れるや。師云く、薬山の道<sup>ち</sup>底、只だ是れ拙鈍。

・薬山道底 不明。

・拙鈍 不明。

師、僧に問つて曰く、近<sup>こ</sup>ろ什摩の處を離れしや。對えて云く、近<sup>こ</sup>ろ蓮華を離る。師云く、古人云えらく、一相の蓮華を出ずるを見ずと。汝既に蓮華を離る。何ぞ更めて這裏に到ることを煩わさんや。對えて云く、和尚に參礼す。師云く、汝は是れ奴縁未だ盡きず。婢を見て慇懃たり。師代わつて云く、遊山翫水し来たれり。

師が僧に問うて云う、どこからおいでたか。答えて云う、蓮華山から来ました。師が云う、古人が云っている、一相の蓮華よりはみ出るものを見ない、と。お前さんは蓮華山から来たのだから、何もあらためてここに来ることはあるまい。答えて云う、和尚さんに參礼しに来たのです。師が云う、お前さんまだ奴縁が盡きんと見えて、婢にお目にかかつて慇懃なんだな。師が代わつて云う、山水を愛でにやつて来たのです。

・古人道 出處不明。

問う、諸餘は則ち問わず。請う師、其の機を盡くせ。師云く、汝が三拝を消<sup>もち</sup>いず。衆に對して道却せり。僧云く、与摩ならば則ち深く尊慈を領せり。師云く、若し是れ別處ならば則ち拄杖到来せん。学云く、和尚寧ぞ与摩にせざる。師云く、又た是れ痛痒を識らず。

問う、ほかのことは問いませんが、どつぞ和尚さんの機をずばりお示し下さい。師が云う、お前さん今更三拝することはない。すでに大衆に對して云つてしまつた。僧が云う、そういうことならよくよくお教えが解りました。師が云う、よそならば棒が飛んで

来るところだぞ。僧が云う、和尚さんなんでそうしないのですか。師が云う、こりやまたこたえん奴じゃわい。

問う、名言の妙義、教に詮する所有り。三科に渉らずして、請う師、指示せよ。師云く、汝が三拝を消う。

問う、旨を得て存せざる時如何ん。師云く、若教し更に一步を進むるも也た是れ無端なり。僧云く、与摩ならば則ち粥飯隨時に去らん。師云く、或いは人有つて汝に借問せば、汝且く作摩生か他かれに向かつて道わん。僧云く、今日好雨多し。師云く、合に棒を喫すべきや。合に棒を喫すべからざるや。学人礼拝す。

問う、旨を得て存しないときどうですか。師が云う、もしそこから一步進めたとしてもやはりいわれなきことだ。僧が云う、それなら、その時々粥を喰うことにしましょう。師が云う、もし人がお前さんに問うたら、お前さんとしてはどう彼に答えるか。僧が云う、有り難い雨です。師が云う、棒を喰うべきか、喰うべきでないか。僧は礼拝する。

問う、機縁不到の處、由お是れ瑕翳を成す。未だ委せず、和尚如何ん。師云く、若し我を問わば我は則ち粥飯の僧のみ。学云く、忽ち人の問うに遇わば、作摩生か伊かれに向かつて道わん。師云く、寒に遇うては則ち寒しと説き、熱に遇うては則ち熱しと説く。

問う、機も縁もとどかないところ、そこすらもなおきすと成っていると云います。和尚さんはどう成っていらっしゃるのですか。師が云う、わしがどうかというのなら、わしはめし喰う能いかな僧侶にすぎぬ。僧が云う、もしかして人に問われたならば彼にどう答えてやりますか。師が云う、寒ければ寒いと云い、暑ければ暑いと云う。

又の時に上堂して云く、四方より来る者、従頭より勘過し、去處勿き底は、竹片もて痛決せよ。直たと是は道い得て十成なるも亦た須らく痛決過すべし。学人便ち問う、既に是れ道い得て十成なるに、和尚は什摩と為てか擗背かに他かれを打つや。師云く、道いを見ずや。

一句合頭の語、万却の繫驢櫛と。進んで云く、与摩ならば則ち学人更に進一歩せん。師云く、若し更に進一歩するも亦た是れ乱走人なり。学云く、和尚に在りて与摩に道つは則ち得たり。師云く、若し是くの如ければ、竹片猶お是れ到来せん。

又たの時上堂して云う、四方からやって来る者は、かたはしからとりしらべ、拗りどころのないやつは竹片でいたくひつぱたいてやれ。たとい百パーセント道い得ても、いたくこらしめてゆかねばならない。そこで学人が問う、百パーセント道い得ているのに、和尚さん、どうして背中ひん剥いてどやしつけるのですか。師が云う、云うではないか、一句合頭の語、万劫の繫驢櫛と、進んで云う、そういうことなら私は一步向こうに出ましよう。師が云う、一步向こうに出たって乱走人だ。学人が云う、和尚さんだからそういつてすまされるんですよ。師が云う、そうだとしたら、竹片はそれでもとんで来るぞ。

・一句合頭語万劫繫驢櫛 びたりとツボを押さえた名句は、人を永久に金縛りにする。「繫驢櫛」はロバをつなぐ杭。般子和尚の語、伝灯録十四、祖堂集五。

・去處 後世の例であるが、大慧書答江給事に、「自家理會本命元辰、教去處分明、便是世間出世間一箇了事底大丈夫也」とあるのを参照。立脚地(自分を据える場所)。

又の時に上堂して云く、古人は未だ口を啓かざる已前に向かつて會取せしむ。今日報慈、古人に同じきや、為復古人に同じからざるや。明眼の漢有らば出で来て断つて断じ看よ。還た人の断じ得る有りや。若し断じて公當を得ざれば、任侏い便ち解く光を放つも亦た用處無けん。此くの如しと雖然も、我れも亦た一分の腥羶を免れず。学人便ち問う、上来を嘖めず。宗風如何に拳すや。師良久す。僧云く、久しく沈痾に處るは全く王膳に因る。師云く、我れ肯つを待たば則ち得たり。

又の時に上堂して云う、古人は未だ口を開かない前にちゃんと解らせた。今日のこのわしは古人と同じであるか、はたまた同じでないか。明眼の漢が居るなら出て来て断を下してみよ。いったい断を下し得るものがあるか。もし断を下して公平でなかったら、たとえ大光明をはなつことができても、ものの役に立たんぞ。とはいうもののわしはまだ一分のなまぐさをまぬかれていない。

そこで学人が問う、わたくしの従来在り方は不問にして、宗風をどのようにお示し下さいますか。師はしばらく黙っておられる。僧が云う、和尚さんのその久しい業病は全く玉膳のせいですね。師が云う、わしがお前さんを肯う時が来たらそういふ云い方もよろしかろう。

・ 古人云 拈華微笑の故事。

・ 放光 十八神变の一。

・ 我亦未免 分腥擅在 一案として一の字を補ってみる。在は句末の強辞。

・ 久處沈痾全因王饑 師の良久を未だなまぐさを免れていないところと見て云ったのであろう。師の答えはいささか負けおしみの嫌いがある。

問う、如何なるか是れ和尚の廣化、師云く、但だ一人のみに非ず更に来る者有るも我れ亦た他かれに向かつて道う。学云く、忽ち大闡提人有りて来らば又た作摩生。師云く、他かれ不還た人に問うや。僧云く、故らに問う、又た作摩生。師云く、但だ他かれを將ち来れ。僧云く、則今現じ来たれり。師便ち出でよと喝す。

問う、和尚さんの広化はどのようなものですか。師が云う、一人には限らない、もつと来る者があつてもわしは彼等に向かつて道う。学人が云う、ひよつとして大闡提人が来たならばどうされますか。師が云う、彼でも人に問うたりするのか。僧が云う、こゝとさらに問います。さあどうされます。師が云う、じゃ彼をつれて来い。僧が云う、いま目の前に現れています。その途端に師は出て行けと怒鳴る。

・ 内の字は、原文に欠けた部分に試みに補つたものであることを示す。

師、僧に問う、盡く 人は人の口を塞がず。作摩生か道わば則ち人の口を塞却せん。対えて云く、今日天好だ暄原作暄し。師云

く、扶提するや扶提せざるや。对えて云く、未だ扶提するを却ぞせず。師因く、後語は前言に副(原作付)わず。師代わつて云く、和尚喫茶せしや。

・ は原文に欠字のあること。中の字は今補つたことを示す。

・ 扶提 不詳。

僧有り師を辞す。問う、脚跟未だ門限を跨えざるに、四目もて相覩て一生便ち休し去らば、更に人の検點を招くや、はた復人の検點を招かざるや。汝若し道得れば我れ則ち囊を提り茶を煎じて汝に送らん。無对。師、杖を以て法堂を趁い出して云く、この虚生浪死の漢。別僧代わつて云く、亦た人の検點を招く。師云く、過什摩の處にか在る。对えて云く、一翳又た作摩生。師、之を肯えり。

僧が師に別れの挨拶をしに來た。師が問う、足がまだしきいを跨がないうちに、四目で見てとり、一生休し去つたならば、そのうえ人のとりしらべを受けるか、または人のとりしらべを受けないか。お前さんもし道い得たならば、わしは茶袋をとつて茶をいれ、お前さんに進ぜよう。僧は答えることができない。師は杖で法堂から追い出して云う、虚生浪死の漢め。別の僧が代わつて云う、やはり人のとりしらべを受けます。師が云う、どこに過があるか。答えて云う、一翳をどうされます。師は善しとした。

・ 四目 よくわからないが、尋常のものでない目をいうのであろうか。

・ 一翳 伝灯録卷十、福州芙蓉山靈訓禅师、初参帰宗問、如何是佛。宗曰、我向汝道、汝還信否。師曰、和尚發言、何敢不信。宗曰、即汝便是。師曰、如何保任。宗曰、一翳在眼、空華亂墜。

師又た僧に問う、見處一切人の見を出づ、還た過有りや。对えて云く、官には針をも容れず。師云く、放過せざれば、過什摩の處に在りや。对えて云く、還た与摩なりや。師云く、汝与摩に道う。還た解く見處一切人の見を出づるを齊得するや。对無し。師云く、大凡行脚人は到處に且く子細にせば好し。杖を以て法堂を趁い出だす。別僧、第二機に代わつて云く、猶お是れ今時致(原作置)得する

なり。

師は又た僧に問う、見處が一切人の見處を超えているんだが、過が有るか。答えて云う、公には針一本通しません。師が云う、許さないのなら過はどこにあるか。答えて云う、そうなんですか。師が云う、お前さんそう云うのなら見處一切人の見を出づといふことを斉得できているのか。僧に答なし。師が云う、修行者といふものはどこでも綿密でなくちゃならん。そう云って杖で法堂から追い出した。別の僧が第二機に代わって云う、今時が招いたことでしかない。

師上堂す、衆已に集る。云く、靈薬は多きを假らず。僧便ち出で来つて啖啖す。師云く、我は則ち你を肯つも、別に人の肯わざる有らん。僧云く、只だ肯わざる底の人の如きんば、活業什摩の處にか在る。師云く、喫茶喫飯す。僧云く、只だ与摩の人の如きんば還た人を檢點するや。師云く、若し是れ与摩の人ならば、始めて解く你が病痛を見ん。其の僧肯わず。師云く、汝、此の如しと雖然も我れ道理在り。

師が上堂する。大集はずでに集まっている。師が云う、靈薬は多きを要しない。すると僧が出てきて啖啖という音を立てた。師が云う、わしはお前さんを肯つが、よそには肯わないものがあるかも知れんぞ。僧が云う、肯わない人というのは、その生活ぶりはどこに在るのですか。師が云う、茶を飲み飯を喰つ。僧が云う、そんな人が人を點檢するんですか。師が云う、そういう人であればこそお前さんの病痛を見てとるのだ。その僧は師を肯わない。師が云う、お前さんはそんな風だが、わしが道理だ。

・靈薬不假多 成語と見られるが、出據は明らかではない。

・啖啖 擬音語。

師、佛日の夾山に見ゆる因縁を拏して云く、古人道う、自己すら尚お怨家に似たり、豈に況や人より得たるをや、と。与摩に判断するは、人の与に眼と為るに堪うるや、為復人の与に眼と為るに堪えざるや。対えて云く、此くの如しと雖然も、猶お些子を較す。師



云く、自己すら尚お怨家に似たるに什摩と為てか些子を較す。对えて云く、唯だこの見解有るのみなればなり。師云く、只だ検點する底の人の如き、眼作摩生。对えて云く、茶に遇えば則ち茶を喫す。師云く、此の人還た人を檢點するや。对えて云く、傳え来たれば則ち不可。師云く、未だ傳えざる時、作摩生。对無し、師代わつて云く、喫茶喫飯す。

師は佛日和尚が夾山和尚と会見た時の因縁をとりあげて云う、古人は「自己すら怨家かたきのようだ。いわんや他人から得たものなど」と云つてゐる。そのように判断するものは人を見てとる眼をもち得ているか、あるいはそうでないか。答えて云う、もち得ていますが、今ひとつです。師が云う、自己すら怨家のようだといふのにどうして今ひとつなのだ。答えて云う、ただその見解があるだけだからです。師が云う、ではそのように點檢するもの眼はどうなっているのだ。答えて云う、茶を出されたら茶を飲みます。師が云う、その人が人を點檢するのか。答えて云う、傳えたときはできません。師が云う、未だ傳えない時はどうだ。僧に答えない。師が代わつて云う、茶を飲み飯を喰う。

・佛日見夾山因縁 夾山和尚の伝に見える。そこでの佛日の言葉は「自己尚似怨家、従人得堪作什摩」となつてゐる。

・傳來則不可 この傳來といふ語が何を意味しているのかよく解らない。

問う、教中に言つ有り。文殊、維摩を讚う、と。維摩還た究竟を得たるや。師云く、未だし、猶お是れ教盡の處。僧云く、究竟すれば作摩生。師云く、喫茶喫飯す。僧云く、文殊と維摩とは還た究竟を得たるや。師云く、少きより出家し、粗ぼ好悪を識る。

問う、教中に言つております、文殊は維摩を讚えた、と。一体維摩は究竟を得ているのでしょうか。師が云う、ただ、教盡のところではない。僧が云う、究竟したらどうなるのですか。師が云う、喫茶喫飯する。僧が云う、文殊と維摩とは究竟を得ているのでしょうか、師が云う、若いときから出家しているので、だいたいものが解つてゐる。

・教中有言 維摩經入不二法門に云う「於是文殊師利問維摩詰、我等各自說已、仁者當說、何等是菩薩入不二法門。時維摩詰默然無言。文殊師利歎曰、善哉善哉、乃至無有文字語言、是真入不二法門」。

- ・教盡處 見馴れない語であるが、直前に引いた経文の註に、「生曰、言迹盡於無言、故歎以為善矣」とある。
- ・文殊与惟摩還得究竟也無 師の答えから察するに、文殊は究竟を得ているかという方向の問いであろう。すると、与維摩の三字をはぶく方がはつきりする。
- ・粗識好悪 ずしりとした重みを持つ語。

師、僧に問う、喫飯せしや。对えて云く、喫飯し了れり。師云く、實主二家、阿那个か眼目最も長ず。对えて云く、請う師、鹽せよ。師云く、方木、圓孔に逗む。

師又た別僧に問う、這個の祇对作摩生。对えて云く、這個合に与摩に祇对すべからず。師云く、闇梨作摩生。对えて云く、某甲が所見に據らば两个惣に是れ瞎漢。師云く、只だ判断する底の人の如き、還た眼有りや。对えて云く、若し眼無くんば争でか解く、与摩に判断せん。師云く、作摩生か是れ此の人の眼。对えて云く、還た某甲を恠得するや。師肯わず。師代わつて云く、適来与摩に判断して還つて瞎漢と成る、得たるや。

師が僧に問う、喫飯したか。答えて云う、喫飯しました。師が云う、實主二家のうち誰が眼がすぐれているか。答えて云う、どうぞ和尚さん目利きしてください。師が云う、方木を円孔にはめ込もうとしている。

師はまた別の僧に問う、此の答えをどう思うか。答えて云う、これはそのように答えるべきではありません。師が云う、お前さんならどう答える。答えて云う、わたくしの見るところでは、両者は、どうあっても瞎漢です。師が云う、ではそのように判断する人には眼があるのか。答えて云う、眼がなければどうしてその判断できましよう。師が云う、どんなのが此の人の眼だ。答えて云う、わたくしをいぶかっておられるのですか。師はうけがわれない。師は代わつて云う、さっきそのように判断してかえつて瞎漢になった、ということですよしいか。

・卷四丹霞和尚の伝に出る話を下敷にしている。

・方木逗於円孔 見当ちがいも甚だしい。話にならぬやり方だ。

・適来与摩判断還成瞎漢得摩 どうも意味がつかみにくい。

因みに僧辞する次いで、師、僧に問う、你、浙中に到るか。浙中の道伴借問せん、語は機に附して顧みず、舌頭玄にして参ぜざる、且く作摩生か報慈と知音ならん、と。是れ汝若為んが他に対えん。対えて云く、終に敢えて和尚に辜負せじ。師云く、汝が平生を看るに、未だ籠を脱せず。師代わつて云く、和尚上堂すれば則ち和尚に随つて上堂す。僧云く、還た知音の分有りや。師云く、平生人の請益を被り、口、楡檐に似たり。

僧がいとまを告げに来た時、師が僧に問う、お前さん浙中に行くんだな。浙中の道伴が問つかも知れん、語が機に投じても顧みないし、いかな名文句を吐いても会おうともしないのがあるが、どんな風に報慈和尚と知音だろうか。こう訊かれたらお前さんどう答えてやるか。答えて云う、決して和尚の顔をつぶすようなことはいたしません。師が云う、お前さんの平生を見ていると未だ籠から脱していないぞ。師が代わつて云う、和尚が上堂すれば和尚について上堂する。僧が云う、それで知音たるの資格があるんですか。師が云う、いつも人に請益されると。口はへの字に結んだまま。

・脱籠 摩訶止観七上に云う、「過去無明善悪諸業、驅縛心識、偏入胎獄、如繫鳥在籠、欲去不得、心識亦爾、籠以四大、繫以得繩」。

・口似楡檐 臨濟録に云う、「眼似漆突、口如楡檐」。楡檐は天秤棒。

師、僧に問う、什摩の處を離るるや。対えて云く、蓮華を離る。蓮花に在ること多少時ぞ。対えて云く、半月來の日。師云く、古人道う、靈利の参学は道伴と肩を交えて過すも、便ち見るを言はざるを得、と。汝既に蓮花に在ること半月來の日、親しく見處を得たる作摩生。対えて云く、専甲彼中に在りと雖も只だ是れ喫茶喫飯せしのみ。師云く、好き五六百人頭を聚めて喫茶喫飯す。為復

見處一般なりや、見處別なりや、対えて云く、大家柴を擔えば則ち柴を擔い、大家米を擣えば則ち柴を擣けば則ち米を擣く。師云く、す既に此くの如し、何ぞ行脚することを用いん。対えて云く、天長く地闊し。什摩の障碍か有らん。師云く、侂に道理無しと道わざるも也た須らく純熟して始めて得べし。

師が僧に問う、どこから来たか。答えて云う、蓮華山から来ました。師が云う、蓮花山にはどれ位いたか。答えて云う、半月あまりです。師が云う、古人が云っている、靈利な修行者は、道伴と肩を交えてやうて行くだけで、見ようともしないことができる。とお前さん蓮華山に半月余りも居たのなら、じかに得た見處はどんな具合だ。答えて云う、わたくしはあそこに居りましたけれども、ただ喫茶喫飯しただけです。師が云う、五六百人もが頭をそろえて喫茶喫飯する、見處は同じか別か。答えて云う、みんなが薪をかつげば薪をかつぐし、みんなが米をつけば米をつきます。師が云う、それだったら行脚することはないだろう。答えて云う、天は遙かに続き、地は広いのです。何のさまたげがありません。師が云う、お前さんに道理がないとは云わないが、もっと純熟せねばならぬ。

・ 古人云 十一頁にも同じ語が見えるが、古人が誰だか解らない。

同文節道場、三更の時、僧俗俱に應聖殿前に集まる。皇帝問う、作摩生か是れ納僧本分の事。対えて云く、若し本分の事を問わば、終に別に道わす。

・ 同文節 天皇誕生日。

皇帝又た問う、還た見るや。師云く、是れ甚摩ぞ。帝再問す、還た見るや。対えて云く、更めて見る可からず。

・ 是甚摩 何の話ですか。

皇帝別に問う、如何なるか是れ一切衆生の本来心。師云く、當位を離れず。帝云く、其中の事如何ん。對えて云く、即心是佛。皇帝便ち礼拝す。

・當位 皇帝の位。

皇帝又た別に問う、作摩生か是れ諸大師道不得底の事。對えて云く、臣、這裏に到りては口を緘することは則ち分有り。

皇帝が又た別の問を發する、どのようなのが諸大師が云い得ない事でしょうか。對えて云う、わたくしはそのところになりますと、口をつくむだけの十分な資格がございませぬ。

・則は即に通じ用いている。

別日又た大安殿上に於いて、百寮の昇殿及び両街の僧録、名公大師を集む。皇帝問う、諸佛に還た師有りや。對えて云く、佛佛相傳す、作摩師無からんや。皇帝云く、如何なるか是れ諸佛の師。云く、此れに過ぎず。皇帝云く、大師の佛法亦た無窮無盡なり。對えて云く、湛湛たる亡言、法海の波瀾、浩瀚にして何の窮盡することが有らん。皇帝遂に礼拝す。

・不過於此 これ以上のもではない。

・湛湛亡言法海之波瀾浩瀚有何窮盡 テキストに乱れがあるようである。

皇帝又た問う、佛何ぞ現ぜざる。對えて云く、佛身法界に充滿し、普く一切群生の前に現わる。未だ嘗て現ぜずんばあらず。

・佛身充滿於法界 普現一切群生前 華嚴經(大九一四〇八a)の句。

時に両街の首座有り、御に対して師に問う、本自圓成、凝然湛寂。和尚、聖人に対して今の甚摩事をか説かん。師云く、汝、更に

聴き看よ。首座云く、那邊の事作摩生。師云く、那邊に向かつて来たつて商量せん。

時に両街の首座が居たが、天子の面前で師に問うた。本自圓成、凝然湛寂と云いますが、和尚は天子の面前で何事を説かれますか。師が云う、もっと耳を澄まして聞いてもらんなさい。首座が云う、那邊の事はどうですか。師が云う、那邊においてた上で商量しましょう。

・本自圓成凝然湛寂 成句と思われるが、今出典を明らかにし得ない。

師、文殊院は是れ報慈の主山なりと説くに因りて、僧、拈じて問う、和尚尋常道えり、祖佛這裏に向かつて出頭し得ず、と。什摩と為てか却つて文殊を以て主と為すや。師云く、他善く能く劔を拈が為に且く後來の留与す。僧云く、未だ委せず。劔を拈する時還た存するや。師云く、拽出著せよ。

師が文殊院は報慈山の主山だと云つたのに因んで、僧が問題にして問う、和尚さんいつも祖仏はここには顔を出せないとおっしゃっておられるのにどうして文殊を主とするのですか。師が云う、文殊が立派に劔を拈したから、まあ後生のために留めておくのだ。僧が云う、解らないのですが、劔を拈したとき存したのですか。師が云う、拽き出せ。

・文殊の話は大宝積經一〇五巻に出る。

・還存也無 何を存したのかが見てとりにくい、文殊が存在したかといつのであるうか。とすれば、拽出著といつのも文殊を目してのことといつことにならう。

問う、古人道えり、師に因るが故に邪なりと。什摩と為てか達摩を宗承するや。師云く、若し達摩師を見れば、什摩の處に向かつて出頭するや。

問う、古人が云つております、師匠のせいだめになった、と。どうして二祖は達摩に宗承したのですか。師が云う、もし達摩

師にまみえるというのなら、達摩師はどこに顔を出しているというのだ。

・ 古人道 統高僧伝十六慧可伝「時有道恒禪師、先有定学、王宗鄴下、徒侶千計、承可説法、情事無寄、謂是魔語、乃遣衆中通明者来珍可門。既至聞法、泰然心服、悲感盈懷、無心返告。恒又重喚、亦不聞命相従、多便皆無返者。他日遇恒、恒曰、我用爾許功夫、開汝眼目、何因致此。諸使答曰、眼本自正、因師故邪耳」。

・ 達摩師 達摩という師。

華嚴経普眼菩薩、三千三昧門に入り、普賢菩薩を覓むるも見ず、と拳するに因り、僧便ち問う、既に是れ定観するに什摩と為てか見ざるや。師云く、只だ妄想して追求し、未だ全眞を曉らざるが為めなり。僧云く、只だ退一步するが如きんば還た見るを得るや。師云く、若し進前退後に於いてせば、則ち対面して千里なり。僧云く、既然に此くの如し、甚摩と為てか一念の想を拳して普賢を見るを得たるや。師云く、道つを聞かずや。繁りに大用を興し、拳すれば必ず全眞、と。

・ 華嚴経云 八十華嚴十定品大(一〇二二)参照。

・ 定観 見なれない語であるが、入定観察ということであるらしい。維摩経弟子品「先当入定、観此人心」。

・ 若於進前退後 於の字が可怪しいが、無理に石のように読んでおく。

・ 対面千里 顔つき合わせても千里離れているのと同様だ。

・ 繁興大用拳必全眞 金獅子章の語。

因みに師看経する次いで、僧便ち問う、古人道わく、佛教祖経は怨家に似たりと。和尚什摩と為てか却つて看経するや。師云く、見れども見ざるが若し、觸事何ぞ妨げん。与摩ならば則ち毘盧を越え去るなり。師云く、亦た是れ傍助插觜。僧云く、何ぞ妨げんの義、何に憑りて致し得るや、師云く、徐与摩なるが為めなり。

・ 古人道 伝灯録十七龍牙和尚伝に、「新豊和尚云、祖教佛教似生怨家始有学分」とある。

・ 觸事 何事につけても。

・ 傍助插髻 不詳。

僧の辞するに因り、師問う、六根無用底の人、還た佛法を行持すること有りや。对えて云く、有り。師云く、既に是れ六根無用、佛法中に於いて作摩生か行持せん。其の僧叉手して進前退後す。師便ち出でよと喝して云く、將に為えり是れ作家と、若し与摩に見知せば更に須らく行脚し、人に遇い去らば好かるべし。別僧代わつて良久す。師、之を肯つ。

龍潭和尚、保福に嗣ぎ、舒州に在り。師、如新と号す。福州福唐縣の人なり。姓は林、靈握院に依りて出家し、纔かに尸羅を具するや、祖筵を志慕して保福の門に登る。密に傳心の旨に契い、数年盤泊す。後、一日保福を辞して閩を出するに因りて、保福云く、汝、嶺を出で去り、幾時に却来するや。師云く、世界平寧なるを待ちて則ち歸りて省觀せん。福云く、与摩ならば則ち汝に个の護身の符子を与えん。師云く、此くの如しと雖然も、慮おそ恐らくは人の肯わざる有らん。保福深く之を器とす。余れより遍く淮海に遊び、檀信傾瞻す。俯して人天に徇い、禅刹を匡す。

師、時有つて上堂し、良久して乃ち云く、禮煩なれば則ち乱る。

・ 禮煩則乱 書經の語。

問う、如何なるか是れ迦葉親しく聞く底の事。師云く、汝若し領得すれば、我は則ち慚あはします。学云く、与摩ならば、則ち師を煩わさずし去らん。師云く、又た須らく棒を著くべし。争でか煩わさざることを得ん。



問う、何が迦葉がじかに聞いたことですか。師が云う、お前さんがもし受け取るのならばわしは惜しみはせん。学人が云う、そういうことなら和尚さんを煩わさないようにしましょう。師が云う、また棒を喰らわさねばならん、煩わしますまいなどと云ったつて通用せんぞ。

問う、省要の處、乞う師指示せよ。師云く、説くを得ず、也た他そに聴まかす。

・也聴他　やはりそれにまかせよ。他は省要處を指す。

問う、古人道う、横説豎説するも猶お未だ向上の一関振子有ることを知らず、と。如何なるか是れ向上の一関振子。師云く、頼に嬢生の臂短きに遇う。

・古人　黄檗、四一三四頁に出づ。

・頼遇嬢生臂短　お前さんにとって幸いなことに、おつ母さんは、わしを、腕が短く生んで呉れた、だからお前さんは殴られずに済むのである。

僧問う、如何なるか是れ祖師意。師云く、道わんと要すれば、何の難きことが有らん。僧云く、便ち請う師道え。師云く、將に謂えり靈利なりと。又た却つて先陀ならず。

・將謂　・とはかり思い違いしていた。

・先陀　伶俐なこと。涅槃經九参照。

師、僧に問う、古人君臣父子を借る、汝還た信するや。對えて云く、今日勞倦して心情勿し。師云く、明朝を待たば還た祇對する

や。対えて云く、藜林に入ること久し。

師が僧に問う、古人は君臣父子を口実にしているが、お前さん信じるか。答えて云う、今日はつかれてその気になりません。師が云う、明日になったら答えるか。答えて云う、ここに来てから久しいことです。

・勿心情 馬祖の伝に「問、請和尚離四句、絶百非、直指西来意、不煩多説。師云、我今日無心情、不能為汝説云」とあるのを参照。

・入藜林久矣 わかりにくいが、今更明日でもありませんまいというよつなことが。

癸己の冬、甲午の春、丁卯の月二十一日遺誠を諸の徒に示誨し、則ち子の時を以て便當に寂に順う。住世四十一年、僧たること二十五夏。

・癸己 冬から病んで甲午の春に遷化したということであろう。

・便當 おだやかに、すんなりと。

福先招慶和尚、保福に嗣ぎ、泉州に在り、師諱は省澄、泉州仙遊縣の人なり。俗姓は阮氏、彼の龍花寺菩提院に於いて出家し、年に依りて具戒す。先ず律部を窮め、精しく上生を講む。酬因は浄方に超ゆると雖も、理に達すれば寧んぞ廣岸に固せん。因りて謂いて云く、我聞く、禅宗最上なりと。何ぞ必ずしも扁然として大理を失せん、と。遂に乃ち擁毳参尋す。初め鼓山、長慶、安國に見るも未だ機縁湊せず。以て保福の門に登り、頓みに他遊の路を息む。

・上生 彌勒上生經。

・酬因 因行に対する酬報。

・浄方 浄土。

・廣岸 未詳。

後、一日、保福忽然として殿に入り、佛を見て乃ち手を挙ぐるに因りて、師、便ち問う、佛、手を挙ぐ、意作摩生。保福、手を挙げて便ち掴す。保福却つて師に問う、汝、道え、我が意作摩生。師云く、和尚也た是れ横身す。保福云く、この一擲、我自ら挿取せん。于時にして云く、和尚唯だ是れ横身するのみに非ず。福、深く之を寄とす。

・横身 身を投げ出してぎりぎりの行動に出ること。

・挿取 伝灯録二十二では収取となっている。

尋いで呉楚に遊び、水雲を遍歴す。却ち招慶の筵に旋り、堅く龍溪の旨を祕す。後ち群使欽仰し、法輪を轉せんことを請つを以て、敬して紫衣と、師號淨修禪師を奏す。

師、初めて開堂するの日、昇座、頃間にして云く、大衆、向後別處に到り、道伴に遇わば作摩生かかれ他に拳似せん。若し拳し得る有らば、試みに衆に対して拳し看よ。若し拳し得れば上祖に辜負することを免れん。亦た後來を埋没することを免れん。古人道つ、通心の君子は文外に相見す、と。還た這个有りや。況や是れ曹溪門下の子孫、合はた作摩生か理論し、合はた作摩生か提唱する。若し問わんと欲すれば宗乗中に向かつて問を致し來たれ。時に人有つて、始めて和尚に諮すと云うや。師云く、白雲千里万里。学云く、承るらく、和尚に言有り、宗乗中に向かつて問を致し來れ、と。請つ、和尚答えよ。師云く、与摩なるも也た可なり。

師が初めて上堂した日のこと、昇座してしばらくして云つた、大衆よ、今後よそに行つて道伴に遇つたとき、どのように彼に示すか。若し示し得るものが居たら、ために大衆の前で示してみよ。若し示し得たら、上祖にそむくことをも免れるし、後生をつずもれさすことをも免れるであらう。古人が云っている、氣心の通じた君子は、文外に交わる、と。このような者が居るか。いわ

んや曹溪門下の子孫ならば、どのように理論し、どのように提唱するか。若し今何か問いたいなら、宗乗中の仕方でもって来なさい。時に人が有って、和尚さんにおうかがいします、と云ったとたん、師が云う、白雲が千里万里とかけはなれている。学人が云う、うかがうところによりますと、和尚さんは、宗乗中の仕方でもって来なさいと言っておられます、どうか和尚さんお答え下さい。師が云う、そういうことでも良いのだらう。

・通心君子文外相見 般若無知論に「至理虚玄、擬心已差。況乃有言、恐所示転遠。庶通心君子有以相期於文外耳」といふ。  
 ・還有這個摩 伝灯録では還有這箇人麼となつてゐる。今伝灯録に従つて訳しておく。

・理論 宛陵録に「此一心法体、尽虚空、徧法界、名為諸佛。理論者箇法、豈是汝於言句上解得他、亦不是於一機一境上見得他」とあるのを参照。

・与摩也可在 白雲千里万里とはねのけたところで向宗乗中に問答は終わった筈なのに、学人が問いをつづけたので、お目出度い初めての開堂ということもあつて、このように答えてのであらう。在は句末の強辞。

問う、昔日、覚城東際に象王廻旋す。今日閩領の南方に、如何が提接せん。師云く、會するや。僧云く、与摩ならば則ち一機啓く處、四句も追うこと難し。未だ委せず、従上の宗乗什摩邊の事を成得するや。師云く、退後して礼拝し、衆に随つて上下せよ。

問う、むかし文殊師利菩薩は覚城の東に至り、象王のようにめぐつて法を説きましたが、今日、閩領の南で、師はどのようにお教え下さいますか。師が云う、わかるか。僧が云う、そういうことではありませんと、一機の発するところ、四句百非もおよびません。わからないのですが、従上の宗乗はどこらあたりの事を成就したのでしょうか。師が云う、引きさがつて礼拝し、大衆と共にやつて行きなさい。

・覚城東際象王廻旋 六十卷華嚴經卷四十五「爾時文殊師利菩薩建立彼諸比丘菩提心已、與其眷屬、漸遊南方、至覚城東。  
 (中書)、爾時文殊師利菩薩、如象王迴、觀察善財、而告之曰、吾當為汝說微妙法、既為分別諸佛正法」とあるによる。

問う、昔日の靈山會は匿王の佛に請う。今日の招慶は大尉の師を迎え、人天交も坐隅に接す。至理願くは開演を垂れたまえ。師云く、者の問を屈著すること莫きや。僧云く、与摩ならば則ち慈舟已に駕す。苦海何ぞ憂えん。師云く、不敢。

問う、むかしの靈山會上では、ハシノク王が佛に説法を請いました。今日の招慶山では、大尉が師を迎え、人天が坐のかたすみにひしめいております。願わくは至理をご開演下さい。師が云う、せつかくのその問が泣くのではないか。僧が云う、そういうこととありますと、慈舟はすでに動いております。苦海も何のつれえることがありません。師が云う、どういたしまして。

・靈山會匿王請佛 出處不明

・大尉 王延彬。

問う、昔日、梵王佛に請うは、盖し法を奉ずるの心の為なり。今日大尉筵に臨む、如何んが拯濟する。師云く、是れ拯濟せざるならず。還た肯つや。学云く、即然すに此くの如ければ、今日の一會は當はた何人の為なるや。師云く、老兄が為めならず。僧云く、什摩人の為めなるや。師云く、却つて老兄が為めなり。

問う、九年の少室、五葉に花開く。十載の白蓮、今日如何んが垂示せん。師云く、人に遇わば作摩生か拳せん。僧云く、与摩ならば則ち法雨霧、群生頼有り去るなり。師云く、別時に与摩に道うは則ち得たり。

・九年少室 達摩を指す。

・五葉花開 六祖慧能を指す。卷二達摩の伝に、吾本来此土、傳教救迷情。一花開五葉、結果自然成とあるによる。

・十載白蓮 白蓮は招慶和尚を指すと思われる。この名は一一一七頁、一一五三頁にも出る。先師保福和尚の下をはなれ十年の年月を経て招慶山に住した和尚さんは、今日どのように垂示されますか。

師、上堂して云く、某甲東道西道することは也た得たり。只だ是れ人に於いて利益なきのみ。只だ達摩大師の如きは梁の普通八年此の土に到り来り、少林寺裏に向かつて冷坐地す。時人喚んで壁觀婆羅門と作す。直に九年を得て、方始めて一人の継続するを得たり。只だ他の如きは是れ觀音聖人、豈に智辯無からんや。法を説くこと解わざる可けんや。只だ當時二祖に分付せしが如きは、是れ个の甚摩の意旨ぞ。二祖達摩邊に於いて个の什摩の事をか承領得せし。還た人の拳し得る有りや。若し人の拳し得る有らば出て来つて拳し看よ。若し人の拳し得る無くんば、大衆側聆して、△甲の衆の爲めに當時の事を拳するを待て。時に衆立ちて顯然たり。師云く、久立珍重。

師が上堂して云つ、わしがあれこれあげつらつのもよかるう。しかし修行者に対して何の利益もないだけだ。あの達磨大師は、梁の普通八年、この国にやつて来て、少林寺において冷然と坐られた。時人は壁觀婆羅門と呼んだものだが、そのまま九年たつてはじめて一人の後継者を得た。ところで達磨さんは觀音聖人だ。智慧や弁才の無かるうわけはあるまい。法を説けないはずもなからう。ではその時二祖にゆだねたのはどのような意旨であつたか。二祖は達磨のそばで何事を会得したか。もし云い得るものが居たら出て来て云つてみなさい。もし云い得るものが居ないなら、大衆よ、耳そば立てて、わしがみんなのためにその時の事情を云うのを待て。しばらく大衆は嚴肅に立っている。師が云つ、久立珍重。

・觀音聖人 卷二達摩の伝に、機縁契わず達摩が魏の国に去つた後、「梁武帝問曰、此是何人。志公対曰、此是傳佛心印觀音大師」とあるによる。

問つ、名言妙句、盡く是れ教中の言。眞実の諦源、請つ師指示せよ。師云く、喫茶し去れ。僧云く、与摩ならば則ち慧日乾坤に朗らかにして、有味悉く皆な明らかなり。師云く、向後、也た須らく更に作家に遇うべし。

問つ、いかな名言妙句もすべて教典中の言葉だといひます。眞理のほんとうの出どころを和尚さんどうかお示し下さい。師が

云つ、お茶飲んでこい。僧が云つ、見事なお示しをいただきました。慧日乾坤に朗らかにして有昧悉く明らかな思いがいたします。師が云つ、これからのちも更に作家に遇わねばならぬ。

・諦源 見なれない語であるが、真理の出どころと解しておく。

・向後也須更遇作家 そんなことではだめだと婉曲に云っている。

問つ、承るらく、和尚拳す、古に云く、師は真金の地に坐して、常に真実の義を説き、光を廻らして我を照らし、三摩地に入らしむ、と。如何なるか、是れ真実の義。師云く、覽老兄此一問。云く、与摩ならば則ち當時に異ならざるなり。師云く、同と説き異と説かば、天地も猶お是れ相近い近し。

・古云の句は出典不明。

・覽老兄此一問 読解不能。

・与摩則不異於當時也 見事なお示しをいただいて、古人の当時に異らないものがあります。當時とは即ち師坐眞金地云の當時。

・説同説異 同じだとか異なるとか云い出すと、それに位べれば天地のへだたりもなお近いというへだたりが生じる。

師上堂して下道するに臨む時、云く、人の問話する者有らば、出で来れ。其の時人の問う無し。良久の間にして師云く、霜重くして方めて知る松柏の操、事難くして始めて見る丈夫の心。珍重。

師は上堂が終わって堂を下ろうとした時云つた、誰か問うことのあるものは出て来なさい。その時間を発するものはなかった。しばらくして師が云つ、霜の厳しい時こそ松柏の真価がわかる、難事にぶつかつた時こそ男児の真価がわかる。おん身大切に。

・霜重方始云 論語にもとづくが、二句の成語としての出典は不明。

師上堂して云く、眞実は言説を離れ、文字は別時に行す。諸上座教に在りや、教に在らざるや。

・楞伽經卷一に「言説別施行、眞実離名字。分別應初業、修行示眞実」とあるによる。時は施の間違ひであろう。

又上堂して云く、本自圓成、機杼を勞せず。諸上座、手を出すか、手を出さざるか。

・本自圓成、不勞機杼 樂道歌の句。

又上堂して云く、古人道う、心を擬すれば即ち差つ、と。招慶は道わん、心を擬して什摩と為てか却つて差を成す。時に人有つて出で来たり又又手して立つ。師は之を肯う。

又上堂して云う、古人は、心を向けたらそれると云っている。わしは云つてやるう。心を向けたらどうしてそれることになるのか。時にある学人が出て来て又手して立った。師はこれを肯った。

・擬心則差 般若無知論に「至理虚玄、擬心已差、況乃有言、恐所指轉遠、庶通心君子有以相期於文外耳」とあるによる。  
 ・師の言は擬心してもよいではないかという意。そこで学人が擬心してみせた、ともとれるし、擬心しないところをみせた、ともとれる。

又上堂して示衆し了り、餉時にして却つて言く、諸上座、後ろを看よ、前を看ること莫れ。珍重。

又上堂して示衆しおわり、一寸として云つた、諸上座、まず来たりし方をふりかえれ。性急に前を見てはならぬ。おん身大切に。



問う、南泉道つ、三世諸佛有ることを知らず。狸奴白牯却つて有ることを知る、と。只だ三世諸佛の如きは什摩と為てか有ることを知らざるや。師云く、只だ慈悲利物するが為めなり。僧云く、狸奴白牯什摩と為てか却つて有ることを知る。師云く、唯だ水草を思いて別に也た求ること無ければなり。僧云く、未審し南泉還た有ることを知るや。師云く、幻と知れば則ち離す。

問う、南泉和尚が云つております、三世諸佛は有ることを知らない。狸奴白牯の方がかえつて有ることを知っている、と。ところで三世諸佛はどうして有ることを知らないのですか。師が云つ、慈悲して衆生を利益するからだ。僧が云つ、狸奴白牯の方はどうして有ることを知っているのですか。師が云つ、ただ水と草を思つのみで別に求めていることがないからだ。僧が云つ、どうでしょう。南泉和尚は有ることを知っていたのでしょうか。師が云つ、幻だと知れば遠離したのだ。

・南泉道 卷十六南泉の伝参照。

・唯思草別也無求 法華経譬喻品、「若作駝、或生驢中、身常負重、加諸杖捶、但念水草、餘無所知。謗斯經故、獲罪如是」、また、南泉の伝に、「問從凡人聖則不問、從聖入凡時如何。曹山云、成得个一頭水牯牛。如何是水牯牛。曹山云、朦朧腫地。僧云、此意如何。曹山云、但念水草、餘無所知。僧云、成得个什摩邊事。曹山云、只是逢水喫水、逢草喫草」とあるのを参照。

・知幻則離 円覚経上「善男子、知幻即離、不作方便。離幻即覺、亦無漸次」。

問う、纔かに三寸を施すや、盡く途中に落つ。途中に落ちずして、請う師指示せよ。師云く、適来豈に是れ擣米し帰するならずや。与摩ならば則ち虚しく此の問を申べざりしなり。師云く、今日はれ眞正。

問う、舌先き三寸を動かしたとたん、すべて途中に落ち込むといひます。途中に落ち込まないで、どうか和尚さん指示してください。師が云つ、今、米を擣いて帰ったところなんだな。僧が云つ、そうおっしゃっていただとこの問いを發したことが無駄ではありませんでした。師が云つ、今日はほんものだ。

問う、非次を嘖めざれ。如何なるか是れ和尚が家風。師云く、一瓶兼ねて一鉢、到處是れ生涯。僧云く、与摩ならば則ち後学の流皆な覆轍を承く。師云く、衆に随つて上下せよ。

問う、非次を責めないでください。どのようなのが和尚さんの家風ですか。師が云う、一瓶と一鉢、あらゆるところが修行の場だ。僧が云う、そういうことでありますと、後学の流は皆なおかげをこうむります。師が云う、大衆とともにやって行きなさい。

又た上堂し、于時にして云く、大衆、混論を識取せよ。劈破を識取すること莫れ。笠土大仙心、東西密に相い付す莫れ。混論か、是れ劈破か。時に人有つて便ち問う、承るらく師に言有り。大家混論を識取せよ。劈破を識取すること莫れ、と。問う、如何なるか是れ混論。師良久す。問う、如何なるか是れ劈破底。師云く、只だ這個是れ。

また上堂し、しばらくして云う、みんな、混論を見てとりなさい。劈破されたものを見てとってはならない。笠土の大仙の心は東西密に伝えられた。これは混論か劈破か。時にある人が問う、うかがうところによると、師は混論を見てとりなさい。劈破されたものを見てとってはならないとおっしゃっておられます。ではどのようなのが混論でしょうか。師は黙している。問う、どのようなのが劈破されたものでしょうか。師が云う、これこのとおり今のこの在りようこのまま。

・笠土大仙心、東西密相付 参同契冒頭の句。

僧問う、古人道う、服像殊ると雖も妙機は不二と。如何なるか是れ不二底の妙機。師云く、你試みに分ち看よ。僧云く、已に師の指を蒙る。如何んが保任せん。師云く、適来作摩生んか會せる。僧云く、是れ什摩ぞ。師云く、若し与摩ならば則ち着衣喫飯せよ。

僧が問う、古人が云っております。服装は異つていても妙機は不二である、と。ではどのようなのが不二底の妙機でしょうか。師が云う、お前さんために分けてみなさい。僧が云う、早くも師のお教えをこうむりました。どのように護持していったもので

しょう。師が云つ、いまどのように解つたのだ。僧が云つ、何の話ですか。師が云つ、そう云つことなら着衣喫飯するが良い。

・古人道云 肇論答劉遺民書「服像雖殊、妙期不二、江山雖緬、理契則鄰」。

・着衣喫飯 修行の日常底。仏道修行に値いすると認められたものよつである。

問う、令を盡くして提綱するも未だ人の検點を免れず。別處に到り人有つて相借訪せば、如何んが知音たらん。師云く、茶飯もて時を延ぶ。僧云く、与摩ならば則ち拈撥無功にし去らん。師云く、府庭に歳を過ごし、春間却来せよ。

問う、如何なるか是れ佛法の大意、師云く、擾擾たり念念たり。晨は鶏、暮は鐘。

問う、何が仏法の大意ですか。師が云つ、こたこたわいわい。朝には鶏が鳴き、夕べには鐘が鳴る。

問う、従上の宗承、如何んが拳唱せん。師云く、老兄の無くんば地を掃くこと又た争で可得ん。

・掃地 清浄、無一物。

問う、全身振いて視すに什摩しほと為てか猶を瓦礫を執ると道うや。師云く、你還た眼有りや。僧云く、若し与摩に問わざれば争でか當時の事を委せん。師云く、汝道え、思和尚見知作摩生。僧進前して又手す。師云く、思和尚に辜負すること莫れ。僧云く、思和尚寧そ与摩ならざらん。師云く、衆眼讓すること難し。

問う、神会和尚は全身をふるつて示したのに、どうして行思和尚はまだ瓦礫を帯びていると云つたのですか。師が云つ、お前さんに眼があるのか。僧が云つ、もしわたしが今のように問わなければ、その時のことがわからないでしょう。師が云つ、では云つてみる、行思和尚の見知はどうだ。僧は進み出て又手する。師が云つ、思和尚が泣くようなことはするな。僧が云つ、思和尚はこ

うではなかったとでもいいますか。師が云う、大衆の眼はごまかせないぞ。

・青原行思の伝参照。

問う、温白夫子の相見は則ち且らく置く、和尚作摩生か相見る。師云く、噯。僧云く、若し是れ学人ならざれば和尚の恠笑を招待せしならん。師云く、汝適来什摩をか問いし。学人礼拝す。師云く、蝦跳んで蚪を出でず。是れ汝會せず。師、頌有りて曰く、佛日天に冲して閑霧開き、覺城東際象王廻る。善財と五衆と承當するも、鶯子は逢うと雖も来らざるに似たり。

問う、温白と夫子の相見はしばらくおいて、和尚どのように私に会われるか。師が云う、シャ！僧が云う、もしこの私でなかったら、和尚の恠笑をまねいたことでしょう。師が云う、お前さん今何を問ったのか。学人は礼拝する。師が云う、蝦は跳んでも升の中だ、わかっちゃいない。師は頌を作つていう、佛日天に冲してくだらぬ霧が開け、覺城の東際に象王がめぐる。善財と五衆とはしかと受けとめ得たが、鶯子は出逢つても来なかったのと同じだ。

・温白夫子相見 莊子田子方篇に出る。

・頌 六十卷華嚴經卷四十五大9一六八八b参照。

問う、巧妙の説又た三寸に渉る。上来するを嘖めずして若為んが指示するや。師云く、我れ你の上来するを責めず。僧云く、深く尊慈を領せり。師意如何ん。師云く、我は則ち且らく置く、汝適来作摩生。学人礼拝す。師云く、我れ適来龍頭蛇尾、是れ汝知らず。師、頌有りて曰く、大士は梁王講せんことを請つて開かしむ、始めて蓮座に登るや梯を躡みて廻る。皇情未だ曉らざれば志公説く、大士金剛已に講じ来たり、と。

問う、巧妙の説は口舌にわたるといつ又た別の一面がある。まかり出たことはお許しただくとして、師はどのように指示してくださいますか。師が云う、わしはお前さんのまかり出たことを責めはしない。僧が云う、有り難き仕合わせです。で、師のお考

えはどのようなのですか。師が云う。わしのこととはしばらくおいて、お前さん今どうだったのだ。学人は礼拝する。師が云う、わしはさつき龍頭蛇尾だったのだぞ。お前さん解らなかつたな。師は頌を造って云う、傳大士は梁の武帝に請われて講義をすることになって、蓮座に登るや梯をふんで引き上げた。武帝には意味がわからなかつたので志公が云って聞かせる、傳大士は金剛經をすでに講じおりましたと。

・碧巖録六十七則傳大士講經參照。

問う、普賢心洞曉す。何ぞ圓通を獲ざるや。師云く、因地に心を修し聞力大なり。初心争でか圓通を得べけんや。僧云く、与摩ならば則ち格高ければ湊泊し難く、門普ければ相應し易し。

問う、普賢菩薩は心あきらかにさつたのにどうして円通を得なかつたのですか。師が云う、因地に心を修して聞力大である。初心のもは田通を獲得できるわけがない。僧が云う、そういうことだと、格が高いのでよりつけず、門がひろいので入りやすいのですね。

・楞嚴經卷六「心聞洞十方、生於大因力。初心不能入、云何獲圓通」云とあるのを參照。

師、時有つて頌して曰く、吳板當年塔未だ開かず、宋雲<sup>宋</sup>慈嶺に師の廻るを見る。手に隻履を携えて分明个、後代如何んが密に薦し来る。

師はある時頌を造つて云う、吳坂に達摩大師を葬つた年、塔は開いていないのに、宋雲は慈嶺で、大師がインドに帰るのに出会つた。手にありありと隻履をひっさげていた、後代どのようにに密密に伝えて来たか。

問う、未審し和尚、法は何人にか嗣ぐ。師云く、漳水深く沈む、寧んぞ浪底を窮めんや。云く、与摩ならば則ち龍溪の一派、晋水

に分流す。師云く、甘言道薄し、何ぞ飾詞を置くや。

問う、おたづねいたしますが、和尚さんは、誰に法を嗣がれましたか。師が云う、漳水は深く沈んでいる、波の底を窮めようがあるものか。僧が云う、でありますと、龍溪のひとながれは晋水に分流したのですね。師が云う、甘言は軽薄である。なんでおべんぢやらを云うのだ。

・漳水、龍溪。保福を指す。

・晋水 師を指す。

問う、如何なるか是れ古佛。師云く、金色無し。僧又た問う、如何なるか是れ今佛。師云く、笑容を帯ぶ。僧云く、未審し、古佛と今佛と還た分るるや。師云く、汝に向かつて金色無し、笑容を帯ぶと道えり。僧云く、古と説き今と説くは学人が置得せしに因る。和尚如何ん。師云く、陽和令を布き、万物惟新たなり。

問う、どのようなのが古仏ですか。師が云う、金色なし。僧がまた問う、どのようなのが今仏ですか。師が云う、笑ってらっしゃる。僧が云う、どうでしょうか、古仏と今仏とは別でしょうか。師が云う、お前さんに対して金色なし、笑ってらっしゃると云うたぞ。僧が云う、古仏とか今仏とかを論ずるのはわたしが云いだしただけです。和尚さんはどう云われますか。師が云う、うららかな春になって万物が一新する。

府主太尉問う、僧衆已に師の指示を蒙る。弟子歩を進めて和尚の慈悲を垂れんことを乞う。師云く、太尉既に歩を進む、招慶、祇接せざる可からず。弟子常籠日久しく、軍府事多くして會せず、乞う師方便せよ。師云く、太尉適来歩を進むと道えり。招慶、祇接せざるべからずと道えり、太尉還た會すや。太尉礼を設けて退く。

府主太尉が問う、僧衆はすでに師のご指示を受けました。わたくしは歩を進めて和尚さんの慈悲を垂れたまわんことをお願い

たします。師が云つ、太尉殿が歩を進められた以上、このわたしは応対せざるを得ない。太尉が云つ、わたくし常籠すること日久しく、また軍府の用事が多いためわかりません。どうか和尚方便して下さい。師が云つ、太尉殿はさっき歩を進めるとおっしゃった。このわたしは応対せざるを得ないと云いました。太尉おわかりか。太尉は礼をして退く。

・常籠 不詳。

問つ、如何なるか是れ般若。師云く、是れ什摩ぞ。僧云く、与摩ならば則ち師に因つて委得し去らん。師云く、委得する底の事作摩生。学云く、茶に遇えば茶を喫す。師云く、太だ深し。

問つ、何が般若ですか。師が云う、なんだ。僧が云う、それでは師におすがりしてわかるようにしましょう。師が云う、わかつたこととはどんなことだ。学人が云う、茶が来れば茶を飲みます。師が云う、はなはだ深いな。

山谷和尚、保福に嗣ぐ、舒州三祖の塔に在つて住す。師、諱は行崇、福州長溪縣の人なり。俗姓は鄭氏。彼の慈雲に於いて出家具戒す。経論に至りては博通せざるは無く、律部精敏に、長く百法を講ず。久しく浙江に在り。後、保福、徒を匡して化の盛んなるを聞き、乃ち義を擁し、衣を拵げて、密に心印を傳つ。漳州の大尉、道風を欽仰し、請つて禅苑を匡さしむ。敬んで紫衣を奏し、佛事を敷揚す。尋いで漳南浦を離れ、遠く皇都に届く。豊りに天恩を捧げ、山谷を賜う。

師、初めて開堂せし時、僧問つ、非次を責めずして、乞つ、師、全示せよ。云く、若し全示せしむれば、更に是れ阿誰ぞ。

師が初めて開堂した時、僧が問うた、非次をおとがめにならないで、どうか和尚全示してください。師が云う、もし全示するとするならば、一体誰にだ。

・更是 下に來る疑問の語氣を強める。

又の時に上堂して云く、不在なりと雖も、未だ常<sup>か</sup>つて諸の兄弟の為にせずんばあらず。若し報恩が為人の處を委すれば、汝に許す、意想知解、五陰身田を出でしことを。若し委し得ずして猶お報恩の者<sup>こ</sup>の両片皮を開くを待つて方めて是れ為人なりとせば、汝に保す、未だ意想知解を出得する解<sup>わた</sup>わざることを。所以に古人喚んで鬼家の活計、蝦蟇衣下の客と作せり。汝、速疾に相應せんと欲<sup>ほ</sup>得せば、只だ如今立地に便ち什摩の罪過有るやを驗取し識取せよ。然らずして根思遲廻すれば、且らく須らく日を以て夜に及ぼし、究竟し將ち去れ。忽然として一日覷見せば、更に少を以て足れりと為すこと莫れ。更に解く研窮究竟、乃至屠坊酒肆、若觸若淨、若好若惡、以汝所見事觀盡教是境界入如入律。若し更に一法の絲髮の如きばかりも見ば是れ此今の事ならず。我れ説きて無明翳障と為す。直に須らく一法の是れ別底の法有ることを見ずして、方めて圓備することを得べし。這裏に到つて更に能く翻擲自由ならば開合して痕縫を成さず。水の水に入る如く、火の火に入るが如く、風の風に入るが如く、空の空に入るが如けん。若し能く是くの如ければ、直下に一口の劍を掲げて、天下人の疑網を刺断するも、一に作さざるが如きに相似ん。所以に古人道う、繫に大用を興し、起さば必ず眞を全うす、と。若し一個の漢有り、与摩の境界に到らば、誰か敢えて汝が面前に向かつて、是と説き非と説かん。何を以ての故ぞ。此の人は是れ今の漢にして諸の限量を超え、因果を透出し、一切處此の人を管し得さればなり。兄弟<sup>ひんてい</sup>若し能く是の如くなれば則ち不可。未だ此の如くなるを得ざれば直に須らく好与にすべし。取次に発言吐氣して、汝を無量劫に沈墜却すること莫れ。与摩の時に到りて便ち報恩道わざりきと道うこと莫れ。珍重。

またある時上堂して云う、わしは居ない時でも、未だかつて諸君の為にしなかつたことはない。若しわしの常なる為人のところ  
 がわかるならば、常識や身心を超え出たと云つてよからう。これに對しわかることができず、なお、わしが両片皮<sup>くちびろ</sup>を開くの待つてはじめて為人とするのなら、未だ常識を超えでることは出来ていないと云わねばならない。古人が亡者の生きざま、蝦蟇衣下客と云う所以だ。みんな、すみやかに相応したいのなら、たった今、たちどころに自分にどんな罪過があるかをちゃんと見てとることだ。そうでなくて、血のめぐりが悪いのなら、まあ日に夜をついできわめて行かねばならない。ひよいと或る日見たとしても、



一寸のことで満足してはならない。更に研究して行くことができ(中略)、もしことあらためて髪の毛一筋などのものを見たならばこのことではない。わたしは無明のかけりだと云う。断じて別の法があると見てはならない。そこではじめて田満と云える。ここに到達して、更に自由に翻擲できるならば、隠顕して痕跡を残さない。あたかも水が水に入り、火が火に入り、風が風に入り、空が空に入る様なものだ。もしこのようであり得るならば、ただちに一ふりの剣を提げ、天下人の疑網を断ち切って、何んにもしなかつたのと同じであろう。だから古人が言うのだ、しきりに大用を起こして、起こす時には必ず眞を全うする、と。もし誰かあつてそのような境界に到達したならば、誰が敢えて君たちの面前では是非を云云しよう。何故かと云えば、この者は、かぎりというものを超え、因果の外に通り抜けた者で、一切の場合に、この者を拘束することはできないからである。みんな、もしこのようであり得るならばよし。このようであり得ないならば、くれぐれもしつかりやって行かねばならない。おいそれとしゃべりまくって、自分を無量劫に沈めてしまつてはならないぞ。その時になつて、わしがなにも云わなかつたとは云わせんぞ。大切に。

・ 蝦蟇衣下客 不詳。なお聯灯会要卷二十一参照。

・ 乃至以下入如入律まで読解不能。

・ 古人道云 金師子章の句。

・ 若能如是即不可 不をはぶいて読む。禅林僧宝伝による。

問う、公私に涉らずして、如何が言論せん。云く、喫茶去。

問う、公私にわたらずに、どのように言論しましょう。師が云う、お茶のんでこい。

・ 公私 眞俗。

問う、丹霞木佛を焼く、意作摩生。云く、時寒くして焼きて火に向かう。翠微羅漢を迎う、意作摩原文になし(生。云く、別に是れ

一家の春。

問う、丹霞和尚は木仏を焼きましたが、どういつつもりだったのでしょうか。師が云う、寒いので焼いて火に当たったのだ。僧が云う、翠微和尚は羅漢を迎えましたが、どういつつもりだったのでしょうか。師が云う、この人ならではの一家の春。

問う、如何なるか是れ佛法の大意。云く、碓は搗ぎ、磨は磨す。

問う、何が仏法の大意でしょうか。師が云う、つき碓は搗くもの、ひきうすはひくもの。

問う、曹溪の一路、請う、師、拳揚せよ。云く、曹溪を屈著すること莫きや。与摩ならば則ち群生頼り有らん。云く、汝も又也た是れ老鼠塩を喫す。

問う、六祖の肝腎のところをどうつか和尚さんおっしゃって下さい。師が云う、六祖を泣かせることになりはしないか。僧が云う、と、しまずとわれわれ頼りがあるというものです。師が云う、お前さんもまた塩を喰うねずみだ。

・老鼠喫塩 不詳。老鼠咬生薑と似たような諺か。

## 祖堂集卷第十三